

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 29 日現在

機関番号：13401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009 ～2011

課題番号：21792300

研究課題名（和文） 団塊世代男性の退職直後の地域参加への関心と閉じこもり予防に関する追跡調査

研究課題名（英文） A qualitative study about expectation for life after retirement and community participation by males of the baby boom generation in Japanese regional cities

研究代表者

米澤 洋美（YONEZAWA HIROMI）

福井大学・医学部・講師

研究者番号：10415474

研究成果の概要（和文）：団塊世代の退職予定の男性 10 名を対象に、地域活動への参加に対する関心と行動のきっかけとなる動機と健康状態について質的に明らかにすることを目的に半構造化面接を実施、分析した結果、退職後もなんらかの形で就労を続ける者は、単に経済的理由だけでなく人との交流や心身の健康の維持、規則的暮らしの継続などの意味を見出していた。加えて地域参加についても全く敬遠するものではないが希望して出向く傾向にはなく、これら男性には就労と地域参加を結びつける仕組みの必要性が示唆された。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study is to clarify quantitatively about males on the cusp of retirement how they imagine the life after retirement and social participation in their communities. Research target were ①Baby boom generation ② 10 males with retirement in March 2011. We requested to tell us regarding their expectations for life after retirement and social participation in their communities. Their ideas were divided into four categories:” I have to participate because I live there.” “I don’ t participate as I imagined before my retirement.” “I like to participate in the activity related to my present work.” “I am interested in the activity of similar person with me.” To them, the need of the structure which related local participation to working was suggested.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,000,000	900,000	3,900,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域・老年看護学

キーワード：看護学、団塊世代、男性、退職直後、地域活動

### 1. 研究開始当初の背景

日本の「団塊世代」と呼ばれる世代は、日本の総人口の約 5.3%を占める。彼らは平成 19 年以降、大量退職の時期を迎えている。この世代の退職後の生活については、経済、産業界だけでなく、医療、保健、介護の分野においても注目している。

先行研究によれば定年退職後の活動予定について、日本は世界の他の地域と比較して、全般として消極的なことが報告されている。特にボランティア活動やクラブ活動など、社会的な活動面での低さが目立つ結果が出ている。社会的な活動の低下は社会的孤立や閉じこもりのリスクを有している。特に閉じこもりを予防・改善の方法としては「社会貢献」「知的貢献」「ボランティア活動」等の有効性が報告されている。大量退職を迎えた団塊世代の社会的孤立や閉じこもりを予防するための方策が急務である。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、『団塊世代』と呼ばれる 1947 年（昭和 22 年）～1949 年（昭和 24 年）生まれに該当する世代の退職直後（1 年以内）の男性を対象に、地域活動への参加に対する関心と行動のきっかけとなる動機と健康状態について質的に明らかにすることである。

### 3. 研究の方法

#### (1) 調査対象

以下の条件を満たす男性 10 名とした。

- ①団塊世代生まれ
- ②平成 22 年 3 月定年退職者

対象者の選定には機縁法を用いた。

(2) データ収集 上記の対象者のうち、研究参加への同意が得られた対象者に対して、対象者の希望した場所でインタビューガイドを用いた半構造化面接を実施した。面接では退職直後の生活と地域での社会参加に対する想いについて語ってもらった。面接内容は対象者の許可を得て録音し、逐語化しデータとした。

(3) 調査内容 ①外出の頻度および日常生活圏域（自宅からの半径）の特定、②地域参加への関心度や行動、③保健行動への関心度や行動について 等である。

(4) データ分析 質的帰納的デザインとし、研究の目的に従い、データを意味のあるまとまりごとに切片化し類似性と差異性に注目しながら概念化しオープンコーディングを行った。なお、本研究は、質的内容分析研究に指導経験のある研究者の助言を受けて進

めた。

#### (5) 調査期間

平成 22 年 3 月～平成 23 年 12 月

上記期間に、退職直前、退職後 1 年以内、退職後 1 年以上退職 2 年以内の計 3 回の個別面接を実施した。

#### (6) 倫理的配慮

研究対象者として候補に挙がった人には、まず電話で連絡し、研究の趣旨、プライバシーの保護、拒否の権利について説明し、研究への参加の意思を尋ねた。参加の意思があると応えた人には直接会い、研究方法、データの取り扱いやプライバシーの保護について説明を口頭と文書で行い、研究参加の意思を確認して同意書に署名を得た、なお、研究者の所属する機関の倫理審査委員会の承認を得て実施した。

### 4. 研究成果

#### (1) 対象者の概要

職業は、5 名は公務員、5 名は民間企業のサラリーマンであった。平均年齢は 60.7 ± 0.2 歳。退職までの勤務年数は 38-42 年であった。持病があり定期的に通院している者 2 名。

#### (2) 退職後の生活と地域での社会参加に対する想い(退職前)

対象者が思い描く退職後の生活は、4 つのカテゴリが生成された。〈 〉はカテゴリを、( ) はサブカテゴリを表している。〈具体的にイメージ化できない漠然とした思い〉では、実際に退職に至っていないことによる（現実味の無い思い）や（現在の仕事に追われて気持ちが退職後の生活に向かわない）や初めて経験する退職というライフイベントに対して（とまどいが先行して考えるのを後回しにする）など、現在の生活とは異なることは理解しながらも自ら積極的に動くというよりは、退職というその日を待っているが故に思いも漠然としていた。

〈身近な退職した知人の生活から自分の生活を重ねあわせる〉では、職場の先輩や知人など最近退職したばかりでその後も会う機会のある人からの情報収集を行い（似ている境遇だから自分もあなるのではと思う）や話を聴いたり体験を目にする機会が多いため（自分にもできそうな気がする）などであった。これは、退職後の生活について強く思い描くまでには至らないが、身近な存在の変化に対して自分の生活をリンクして考えていることがうかがわれた。

〈ただひたすら仕事をつづけることで自分らしくある〉では、永年にわたる仕事生活

が人生のメインであるがゆえに（仕事のない人生なんて考えられない）や自己実現を仕事で果たして来たとの思いから（仕事生きがい）、（退職しても途切れなく働き続けたい）といったできるだけ長く仕事をつづけることそのものが人生の目標であり、退職後も現在の生活の延長を望んでいた。

＜これまで脇で続けてきたことがメインになる＞では、（退職して時間ができたらもっとやりたい楽しみなこと）としてこれまで仕事という時間の制約があるから思いっきりはできなかったことを、もっとやりたいという思いや、仕事を理由にして積極的にはしていなかった事柄を（生活の中心において過ごす）など、若いころから続けてきた事柄に対して比重を重くして過ごしたいとの思いがあった。

地域参加への想いについては3カテゴリーが生成された。

＜地域で暮らす以上、かかわらないわけにはいかない＞、（義務としてのコミュニティ）では全くかかわらないことは許されないと、住民の責任を果たさねばいけない。や（周囲の住民から非難されない程度のかかわり）として積極的に地域参加したいという思いではないが、とがめられない程度には参加して行きたい。との思いがあった。いずれも自治会などの当番や清掃活動などの行事をイメージして語られていた。

＜何から初めていいのかわからないことによるとまどい＞では、これまで地域参加を妻や親などの本人以外の家族に任せていた場合に（知らない人達とのかかわりへのとまどい）や（地域で何が行われているのかわからないことによる漠然とした不安）（経験のないことへの不安）が聞かれた。

＜今もかかわっていることの延長上にある活動＞では、地域参加をPTA行事や地域のお祭り、地域の役員等で経験済みである人からは（これまで経験してきた活動の延長）であり、（日ごろの生活の一部）であるために特に退職を前後して特別に意識して変わることはないとの思いが強かった。

以上の結果から定年退職を間近に控えて退職後の生活をかなり実現可能性のあるものから仕事の邁進だけが関心事としてまったく関心がないものまで対象者によって差が見られた。これは仕事に対する思いの強さや仕事以外での取組みの程度によっても個人差が大きかった。60歳定年とはいっても実際には年金支給の始まる65歳まで就労を考えることは自然であり、仕事がかれからも続くからあまり劇的に生活が変化するとは思わないことも影響しているものと考えられる。また、定年間近の男性では組織内での

責任や役割も重く、退職を迎えるそのときまで時間的にも余裕がないということも考えられる。団塊世代に対する先行研究によれば、84.9%の人が「定年退職後も働く」との報告もあり、その理由として「経済的理由から」、「健康のため」、「社会との接点を持ち続けたいから」の回答とも同様の結果が見られた。しかし地域の社会参加への想いになるとまったく思い描けないというものはなかった。地域参加とって果たすべき役割や責任との思いが強く、自治会での順番に回ってくる役員や全員参加の清掃活動などをまずイメージするものが多くボランティア活動や老人会等の集まりについては関心が薄かった。これまでの地域での社会参加での体験を背景とし認識していると考えられた。社会の一員として最低限のことは参加しないといけないとの思いが強く、顔見知りの知人や住民から頼まれれば地域活動には参加するつもりでいることがわかった。退職前の段階で抱くこの責任感や使命感を利用した参加の誘いかけを工夫することで閉じこもりを予防することに繋がるのではないかと考える。

(3) 退職後の生活と地域での社会参加に対する想い(退職直後～2年以内)

退職直後の地域参加への想いについては＜地域で暮らす以上、かかわらないわけにはいかない＞、＜退職前におもっていたより地域活動にはかかわっていない＞、＜今もかかわっていることの延長上にある活動＞＜すでに退職した似たような人の活動は気になる＞の4カテゴリーが生成された。

＜地域で暮らす以上、かかわらないわけにはいかない＞では（積極的に地域参加したいわけではないが義務的気持ち）や（これまで地域に世話になった気持ち）等のサブカテゴリが抽出され、消極的ながらも地域参加を意識していた。これらは退職直前にも抱いていた思いと同様のカテゴリであり、退職後も大きな変化が見られなかった。

一方、＜退職前におもっていたより地域活動にはかかわっていない＞では、退職前にやりたい、参加したいと思っていた地域参加に対して実際はできていない現状があり（退職前に描いた社会参加と現実の違い）では退職前に関心を示していた公民館に向く、地域の催しについて調べてみる、シルバー人材センターに赴く等の行動について退職後に行動に移していなかった。また、同様に（実際の社会参加は一步踏み出せない）でもやりたいことは浮かぶけれども退職後新たに起こしたアクションは少なく、退職前に描いたような退職後の地域参加はできていないことに関連するサブカテゴリが抽出された。

＜今もかかわっていることの延長上にある活動＞は、退職前と同様のカテゴリでありながら、就業に重きを置き、その上でこれまでやった経験のある地域参加に取組みたいとする思いがうかがわれた。全く就業していないものは1名であった。(就労に対するこだわり)では再雇用のほか農業やパートタイム等何かしらの仕事を行っていた。また、(もう一度働きたいという思い)では、一旦就業から離れた生活をした後に再び職を探し定職に就くなど退職前の生活に似たライフスタイルに戻る者もあった。(退職前の就業に変わる新たな就業)では、退職前から準備した農業に従事し、退職後は仕事の替わりに取組むなどの生活をおこなっていた。

＜すでに退職した似たような人の活動は気になる＞では(先に定年した男性から聞く地域参加の実情への関心)や(同じ会社にいた先輩の活動への興味)等のサブカテゴリーが抽出され、退職前の職業や自分の今後の生活を境遇の似た対象者に退職後の生活を投影していた。

以上の結果から、定年退職前に描いていたようには、地域参加できておらず、地域の社会参加について模索している状態にあった。しかし地域の社会参加について消極的ではあるが拒否的ではなかった。仲間作りより果たすべき役割や責任との思いが強く、これまでの地域での社会参加での体験を背景とし認識していると考えられた。退職後もなんらかの形で就労を続ける者は、単に経済的理由だけでなく人との交流や心身の健康の維持、規則的暮らしの継続などの意味を見出していた。加えて地域参加についても全く敬遠するものではないが希望して出向く傾向にはなく、これら男性には就労と地域参加を結びつける仕組みの必要性が示唆された。

(4) 行政の健康診査への受診行動と未受診の理由(退職後2年以内)

退職後の健康診査の受診状況は、10名中7名は受診していなかった。未受診の理由として＜人間ドッグほどの魅力がない＞＜検査項目が少ない＞＜通院しているから大丈夫＞の3つのカテゴリが抽出された。

＜人間ドッグほどの魅力がない＞ではこれまで職場の健康診査として人間ドッグを受けてきた経験から(自治体の健診は人間ドッグより見劣りする)(人間ドッグなら受けたいが自治体の健診には行きたくない)(価格が高くていいから人間ドッグを受けたい)などこれまでの健康診査を受けた環境を踏襲したいという思いが強く、退職後は人間ドッグを受けていないが、代わりに市町村の健

診を受けるという志向性は無かった。

＜検査項目が少ない＞でも上記同様に市町村の実施している健康診査についてもチラシや広報で調べていて(希望するような検査項目がない)(多くの検査項目が入っていると安心する)などのサブカテゴリが抽出された。

＜通院しているから大丈夫＞では(定期的受診以上の検査項目がない)(健康診査はこれまで健康な人が病気をみつける場)との思いが強く、健康診査受診の案内が市町村から届いたとしても自分は対象外で健診を受ける必要性を感じていなかった。

以上の結果から、団塊世代男性の退職後の受診行動には、これまでの就労時の受診行動と同様の検査内容で受けたいとする思いがうかがわれ、同様の検査内容が整わないのであれば全く受けないという行動に出る者がいた。

(5) 公的な場での健康に関連した行事に不参加の理由

市町村保健センターや公民館等の公的な場で実施される健康づくりに関連した行事への参加の程度と参加/不参加をたずねた。実際に参加経験のあるものはいなかった。不参加の理由として、＜年齢的にまだ早い＞＜内容を知らない＞＜介護が必要になったら行くところ＞とする3つのカテゴリが抽出された。

＜年齢的にはまだ早い＞では、(後期高齢者が行く場)(もう少し歳をとったらいくと思う)等のサブカテゴリが抽出された。対象者らは60歳代前半にあり自分たちを現在健康づくりに通っている世代を区別していた。スポーツクラブや退職前から取組んできたスポーツのサークルなどには退職後も継続していたり、退職後の課題として体力づくりをあげる者も見られたが、公的な機関で提供されるプログラムへの関心が薄かった。

＜介護が必要になったら行くところ＞では(デイサービスとの齟齬)(公的機関は最後に世話になる場所)等のサブカテゴリが抽出された。これまで参加したことが無いが、親の介護や人から聞いたうわさを基にして、デイサービスやデイケアのイメージを健康づくり事業に重ね合わせていた。介護保険のサービスについてはテレビや新聞等のマスメディアを通して目にしたことがあり、要介護高齢者向けのプログラムと健康づくりプログラムを混同して捉えていた。その結果、介護が必要になれば利用することも仕方ないが、元気で働ける自分には関係がないと考えていた。

以上の結果から従来市町村や公民館が提

供する健康づくりに関連したプログラムには男性の参加が少ないことは指摘されてきたところであるが、介護保険プログラムを提供する場という思い込みが強く、イメージの転換を図るために広報や誘い方を工夫しない限り、容易に参加しないことがうかがわれた。

#### (6) 本研究の限界

対象を機縁法にて募集しており、公募等ではないため理論的サンプリングを行うことができていなかった。また、対象者は地方都市としているが一都道府県内であり地域性の偏りも考えられデータの収集方法には工夫が必要であり結果の全ての一般化には慎重を期す。今後地域を拡大し、対象者選定のバイアスのかからないようにして理論的サンプリングを行う必要がある。

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計1件)

①HIROMI YONEZAWA, A qualitative study about expectation for life after retirement and community participation by males of the baby boom generate in Japanese regional cities. 第二回 日韓地域看護学会共同学術集会、平成23年7月17日、神戸市看護大学

[図書] (計0件)

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

[その他]

なし

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

米澤 洋美 (HIROMI YONEZAWA )  
福井大学・医学部・講師  
研究者番号：10415474

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし